

No.82

吉祥寺本町
二丁目にて

この街が好きだから

武蔵野スケッチ物語

絵と文・大須賀一雄

見慣れた風景も、絵になるとちょっと違う趣が出てきます。

そんな武蔵野の風景を、大須賀一雄さんが春夏秋冬で切り取って描きます。



この作品は、昨年の2月に吉祥寺本町2丁目の井ノ頭通り沿いで描いたものである。この日は、冬にしては暖かく、普段通りに絵が描けて良かったと思っている。

最近、寒さの厳しい日には写生をしないことにしているが、寒中の写生で一度だけ珍しい体験をしたので紹介したい。

約30年前のこと、JR東日本の依頼で上越線の土合駅を描いたことがあった。その日はとても寒かったので、防寒服に身を固め写生を開始した。下絵が終わり、絵の具を使う段階で、絵筆を水入れに差し込み、筆先に絵の具を付けた。そして、いざ着色しようとして筆を上げた瞬間、指先に何か「ピリッ」とした感じがした。筆先を画用紙にタッチしたところ、何と筆先が棒のように硬く凍っているではないか。色も全く塗れなくなって、本当に驚いたが、水を含んだ筆先が空中で瞬間的に凍ってしまったのだ。

思い出の 寒さの度合 筆で知る

おおす かずお 水彩画家。1937年群馬県出身。武蔵野市在住。画材は透明水彩。元JR東日本国際課勤務。JR東日本絵画クラブ初代事務局長。これまでJR東日本の駅の絵を1000点以上描き、新聞、雑誌、テレビなどでも紹介されている。著書は『あなたの街の駅物語』（日貿出版社）、『スケッチお手本帖』（素朴社）、『透明水彩の世界・ヨーロッパ』および『緑』（旅もようスケッチ会）ほか。現在、JR東日本の大人の休日倶楽部のカレンダーの絵を担当。海外スケッチ旅行歴も長く、これまで50カ国以上を訪れ、個展も30回を超える。